

研 究

支援者の捉えた知的障害のある女子の
性発達に伴う課題と対応

岡田 久子, 尾原喜美子

〔論文要旨〕

本研究の目的は、支援者が、知的障害のある女子の性発達をどのように捉えているのかを明らかにし、特別支援学校における性教育への示唆を得ることである。知的障害のある女子の男女交際、結婚・育児、人間関係や生き方などについて、支援者10名にインタビューを行い、逐語録として内容を分析した。結果、支援者の捉えた知的障害のある女子の性発達は、【リスクの大きい交際】、【サポートによる成長と結婚】、【親としての成長への見守られ】、【豊かな生活】の4つのコアカテゴリーにより構成されていた。支援者は、知的障害のある女子の性発達は、リスクの大きい交際が課題として存在するが、サポートを通して成長・発達すると捉えていることが明らかになった。

Key words : 支援者, 知的障害, 性発達

I. はじめに

知的障害者の歴史において、障害者は自らの人生を生きる主体ではなかった。温情主義に基づく保護主義や優生思想に基づく脅威視などから、彼らを一個の人格として正当に受け取る姿勢は全く見られていなかった。しかし、1995年のワルシャワ宣言¹⁾において、「すべての知的障害者は、人間的尊厳が明確に与えられており、自由と権利はその重視の結果である」として、自由や権利について提起された。この自由や権利が具体的に守られるためにはさまざまな事柄が保障されなければならない。まず、生存権に始まり、支援体制の整備、さまざまな場面への本人参加・自己決定などが重要になってくる。

知的障害者が、特別支援学校を卒業後、通勤寮やグループホームを経て地域に繋がっていく場合は、男女交際・結婚・育児などの課題が出てくる。家庭で課題

が生じた場合、相談支援が得られずにネグレクトや虐待等が起こっている事例もある。

特別支援学校卒業後、知的障害者の働く場・暮らしの場・趣味や余暇の場において、確かな支援を受けながら豊かに過ごし、社会的に自立してもらいたいと考える。特別支援学校の卒業生の中には、結婚、育児を希望する者もいる。知的障害者の場合は、特に結婚や育児という場面を通して、厳しいことやつらいことなどいろいろな場面を経験する。これらの経験から男女の協力や関係性を学び、人間としての成長に繋がっていく。知的障害のある女子の性発達の課題をサポートするには、学校から地域への連携の必要性や支援者の存在が重要となる。その中でも支援者が知的障害者の男女交際や結婚、育児をどのように捉えているかが支援に大きく影響すると考える。

そこで、本研究では、支援者が知的障害のある女子の性発達をどのように捉えているのかを明らかにし、

The Problem and Correspondence with the Sexual Development of Mentally Disabled Females as Viewed
by Support Staffs

Hisako OKADA, Kimiko OHARA

高知大学教育研究部医療学系看護学部門（教育/研究職）

別刷請求先：岡田久子 高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

Tel/Fax : 088-880-2552

[2275]

受付 10. 9. 21

採用 11. 7. 29

特別支援学校における性教育への示唆を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究。

2. 対象者

1) 人数

以下の要件すべてを満たす10名。

2) 要件

- ①入所更生施設・入所授産施設・通勤寮・グループホーム等に勤務している支援者。
- ②支援度の低い青年期女子に関わった経験のある支援者。
- ③性別・年齢・資格は問わない。

3. データ収集方法

データ収集は、研究者が作成したインタビューガイドをもとに半構成的面接を行った。インタビューはプライバシーの守れる個室で1人60分程度行った。内容は、男女交際や結婚、育児、人間関係や生き方等に関する思い等である。対象者の許可を得たうえで録音し、対象者ごとに、逐語録を起こした。

4. データ収集期間

平成20年6月中旬～7月末日。

5. データ分析方法

得られたデータを繰り返し読み、支援者が捉えた知的障害のある女子の性発達に関連している内容を文章で抽出した。抽出した内容をコード化し、内容を比較検討しながら、意味内容と類似性に従って分類しカテゴリー化した。さらにカテゴリー間の類似性や関連を検討した。

6. 用語の定義

- 1) 「知的障害」とは、自立支援法による障害程度区分²⁾を参考に障害区分1～2の支援度の低い女子で、就労継続支援を受けながら、グループホーム・ケアホーム等で生活している者とする。
- 2) 「支援者」とは、生活・就労支援や居住支援を通して知的障害のある女子と関わっている者とする。

- 3) 「性発達」とは、性器や性行動の発達だけでなく、人間関係や愛情・友情・思いやりなどの人間関係における社会的、心理的側面を含めた幅広い概念で捉えた成長発達とする。

7. 倫理的配慮

各施設長から対象者選出の協力を得たうえで、研究者が対象者に、研究の趣旨・研究参加の自由意思・拒否の権利・途中中断が可能であること・プライバシーの保護・個人情報守秘の厳守・研究論文の公表の可能性等を説明し、同意を得た。データは研究者が責任を持って管理することを約束した。本研究は、K大学医学部倫理委員会の承認を受け実施した。

III. 結果

1. 対象者の概要

研究対象者は、支援度の低い知的障害のある女子に関わった経験のある者10名で、男性2名、女性8名。経験年数は、5年未満2名、5年以上2名、10年以上6名。年齢は、20～30代3名、40代1名、50代2名、60代3名であった。

2. 知的障害のある女子の性発達の特徴

支援者が知的障害のある女子の性発達をどのように捉えているのか分析した結果、【リスクの大きい交際】、【サポートによる成長と結婚】、【親としての成長への見守られ】、【豊かな生活】の4コアカテゴリー、10カテゴリー、25サブカテゴリーが抽出された。

以下、カテゴリー別にその概要を示す。【 】はコアカテゴリー、〈 〉はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、網掛けはデータを示す。

1) 【リスクの大きい交際】

リスクの大きい交際とは、知的障害のある女子の男女交際は、性行動に対するコントロール不足や判断力の弱さなどから出会い系サイトによるリスクや中絶に伴う身体への負担や性被害などのリスクが大きいことである。〈かかる負担が大きい〉、〈コントロールできない性行動〉、〈判断力の弱さと性被害〉の3つのカテゴリーから構成されていた。

① 〈かかる負担が大きい〉

支援者は、知的障害のある女子の人工妊娠中絶に関わることで、出会い系サイトの危険性や中絶後の心身に伴う問題などを大きな課題と捉えていた。知的障害

のある女子は、妊娠に対する自覚の低さや中絶に対する知識不足から望まない妊娠を繰り返し、責任が取れず中絶せざるを得ない《中絶による負担》などマイナス面の多い交際を行っていた。それは《女性に負担がかかる交際》であったり、軽い気持ちで出会い系サイトにアクセスし、《誤った情報による交際》であることを話していた。

「みなさんいろいろな事情で堕す人がいるわけですが、まあ、結婚していない自分のそういう風な行為で、そういう風になった人がほとんどなのですが、私も常にその場面に立ち会って、泣くのだったらそんなことをしなければいいのと言いたいけど、その時は本当に言えませんよね。」(F)

支援者も関わりにくく、いくつかの事例を通して、《妊娠に対する自覚と責任》を持つことの大切さを切実に述べていた。

② 〈コントロールできない性行動〉

支援者は、知的障害のある女子の男女交際に関わり、身体を大切にしたい交際のできていないことやダイレクトでコントロールできない性行動を課題と捉えていた。知的障害のある女子の交際のきっかけや交際の仕方などは健常者の若者と同様で《現代の若者と同じつきあい方》で異性に関心を持ち将来を考えた交際をしていると受け止めていた。

「卒業された同級生や先輩後輩の中で特殊な感情が生まれて男女の関係までというケースがある。」(A)

その反面、性行動に対する判断が十分でないまま興味本位から身体につき合いが先行してしまう《身体を大事にできない》ことを話していた。

「目先の好きな男の子と遊びに行きたい。興味のある性交渉、セックスをしてみたいという誘惑の方がもっと大きい…」(C)

③ 〈判断力の弱さと性被害〉

支援者は、知的障害のある女子が男女交際において、《マナーやルールを守れない交際》の中で羞恥心や判断力の弱さが性被害に繋がる可能性があることが課題と捉えていた。

「人前で周りが一切気にならない状態で2人だけの世界がすごくできやすいのかなと。」(D)

「(男性に)誘われるとついて行ってしまいそうな感じがする。この人が好きか、本当にこの人が信頼できるのかではなく言われたからついて行く、誘われたからついて行く、そんな主体性のない所(が危険)…」(G)

支援者の注意がなければ《性の被害者になりやすい》状況にあることを述べていた。

2) 【サポートによる成長と結婚】

サポートによる成長と結婚とは、知的障害のある女子が、多くの人に見守られながら困難を乗り越え一歩ずつ成長し結婚することに繋がることである。〈見守られと克服〉、〈成長への道筋〉の2つのカテゴリから構成されていた。

① 〈見守られと克服〉

支援者は、知的障害のある女子の結婚は、多くの人に見守りと支えにより困難を乗り越え、課題が克服できると捉えていた。親やグループホームの世話人など《たくさんの人による見守られ》の中で、サポートがあれば結婚することができることを話していた。

「ホームに入って、人のお世話になりながらも結婚生活ができる子もいるし、それと相手の方の親御さんとか、自分の親御さんがしっかりしていれば(結婚できる)…」(C)

「その中でも特例なのは何かサイト、出会い系サイトで知り合って結婚というケースがあった…」(A)

出会い系サイトで知り合った結婚や親としての準備のない状態での結婚など結婚までの道のりを大冒険しながら《いくつかの困難を乗り越える》様子について述べていた。

② 〈成長への道筋〉

支援者は、知的障害のある女子への就労や結婚した男女への関わりから、人間として一歩一歩成長していく障害者の姿を捉えていた。就労を通して生活の安定を獲得し、将来の生活への見通しや目標を持つことができる《就労と生活の目標》が結婚を前向きに考えられることに繋がると捉えていた。

「経済的にその辺はね、きちんとしていれば、もちろん（結婚を）前向きに考えていってもいいのではないかということで（このようなケースが）何ケースもありましたね。」(F)

結婚した相手との《支え合い・助け合いの中での成長》が見られることや、結婚に向けての家事の互いの役割分担が必要であること《家事の取得と役割分担》などの経験を積んでいると話していた。

「結婚することによっていろいろなことができて、それによって人間的に幅が広がったり成長したり、その部分是一緒だと思う。」(C)

3) 【親としての成長への見守られ】

親としての成長への見守られとは、知的障害のある女子は、育児に積極的に関わることで責任感が育ち、見守られながら親として成長していく姿のことである。〈育児に対する不安や心配〉、〈責任感と親業の充実〉、〈育児能力不足へのフォロー〉の3つのカテゴリから構成されていた。

① 〈育児に対する不安や心配〉

支援者は、知的障害のある女子の育児は、不安や心配が多くサポートが必要と捉えていた。生まれた子どもの健康な成長に必要な検診や予防接種へのサポートはもとより、障害児が生まれた場合の育児や育児不安が虐待に繋がる可能性があること等《育児困難》な場面が多くあること、子どもの発熱時の対応など危険を察知する判断力が未熟なため《緊急時の対応が困難》であることなどを話していた。

「状況に応じて、知的の方（知的障害のある人全般）は臨機応変というのがなかなか厳しい部分があるので、どうしたらいいのか（緊急時にどんな対処をしたらいいのか）というのが一番問題だと思います。」(E)

子どもへの愛着形成が難しく愛情の注ぎ方など《子どもへの接し方がわからない》ことも話していた。

「子どもとの接し方を知らない、どうやって愛情を注いだらいいとか（中略）やっぱり、自分が親からしてもらっていないからか。」(D)

② 〈責任感と親業の充実〉

支援者は、知的障害のある女子が一つ一つの経験を重ね、最初はミルクの作り方やおむつの替え方など全

くわからない所から母親としてたくましく成長し親業の充実感に繋がると話していた。

「お母さんになったなと思いますよね。大変なのに連れて買い物をしているではないですか。たくましいですよ。」(F)

知的障害のある女子は、育児負担感や自分の遊びの優先などから育児逃避、忍耐力不足など《育児に対する責任感不足》の様子が見られたりする。しかし、最初は育児に対する気持ちや知識が不十分なまま始まる子育てであるが、支援者のサポートにより、繰り返し学びながら育児を習得し、たくましい母親へと成長していくこと《経験を通してのたくましさ》を述べていた。

③ 〈育児能力不足へのフォロー〉

支援者は、知的障害のある女子の育児へのサポートとして、養育環境を整えること、育児能力不足に対するフォローが必要であると捉えていた。生まれてきた子どもへの《養育能力の弱さ》は、子どもに影響することや《家庭教育の限界》などについて話していた。

「親が一生懸命育児をしていても、そういう読み書きとか言葉とか、その知的障害のレベルの読み書きしか、親が与えられないと、どうしても子どもがそれ以上にはならないということ。」(B)

4) 【豊かな生活】

豊かな生活とは、知的障害のある女子は、生活や仕事の間を通して生きぬく力を培い、さらに、余暇の充実も図りながら豊かな生活を目指し成長していくことである。〈余暇の充実〉、〈体験から得た生きぬく力〉の2つのカテゴリから構成されていた。

① 〈余暇の充実〉

支援者は、知的障害のある女子の社会での生活は、自分なりの趣味や楽しみを持つことで余暇活動が充実し、それが自分なりの生き方や《余暇の過ごし方》となると捉えていた。

「本人（知的障害のある女子）の能力もいろいろありますけど、(〇〇は)今メールをある程度するのですけど（趣味を持っています）、若い子たちはどちらからか、普通にきれいな文章がくるので（メールで送られてくる）。」(B)

《活動の広がり生き方の変化》で、仕事を通して

社会性を身につけ活動が広がり、そのことで社会そのものが知的障害のある女子の生き方の変化を認めるようになってきていることなどについて話していた。

「社会性がわりと身につけている点で、保育所にいても、うまくみなさんとできています。お母さんたちとお付き合い、お父さんたちとも。」(F)

② 〈体験から得た生きぬく力〉

支援者は、知的障害のある女子は、生活や仕事の場で人間関係を築きながら主体性を身につけ、体験を通して生きぬく力を育んでいくと捉えていた。

「いろいろ心配なことやお金のこと、生活を維持していくことや、感情面のトラブルなどいろいろあるが、生活をすればできるというたくましさも感じることがありますね。」(A)

仕事に対する責任感を身につけ、グループホームを出て一人で生活することを通して《自立と成長》する、自己主張・自己表現を通して、自分の好きなことのできる力や自ら行動を起こす力《主体的な生き方》ができ、人との距離感や関わり方など《人間関係の持ち方》が取れていることを述べていた。

3. 支援者が捉えた性発達の構造

支援者の捉えた知的障害のある女子の性発達は、【リスクの大きい交際】が課題として根底に存在する。【リスクの大きい交際】は、〈コントロールできない性行動〉と〈判断力の弱さと性被害〉が重なり合い、出会い系サイトで惑わされたり、中絶後の心身に伴う問題など

〈かかる負担が大きい〉。この性発達の根底にある知的障害のある女子の【リスクの大きい交際】に対して、支援者のサポートがあることで、知的障害のある女子は、〈見守られと克服〉、〈成長への道筋〉を辿り、【サポートによる成長と結婚】、【親としての成長への見守られ】を受けて、【豊かな生活】を送ることができる。

IV. 考 察

1. リスクの大きい交際

人は障害の有無に関係なく、思春期を迎える頃から異性に関心を持ち出す。障害児の場合も同様で学校生活で男女交際の場面に出くわすことが多々ある。インタビューで支援者は、知的障害のある女子の妊娠に対する知識・認識の低さを述べていた。知的障害のある女子が“自分の身体を大切にする”ということを理解できるような支援が重要である。長浜は、性行動が表出する背景やその行動の意味を的確に捉えることの重要性を述べている³⁾。男女交際の中で自己本位な行動にならないように、性行動において、特に性的接触に伴う結果や責任について考えていけるように、知的障害のある女子に働きかけることが支援者に求められている。知的障害があると倫理やモラルの概念を理解することが難しい反面、感性は自己本位であるが鋭く、性行動ではセルフコントロールが弱く、性行動はダイレクトになりやすいといわれている⁴⁾。最近の若者の性の特徴として、言葉による関係性が作れず、知り合ってから性交渉するまでの期間が短いことが挙げられる。知的障害のある女子の人工妊娠中絶の理由もこれらと重なる部分がある。また、生活の自立が不十分であることや自分の置かれている状況が理解できず男女間の同意があれば安易に性交渉をする傾向がある。

知的障害のある女子の判断力の弱さに伴うリスクとしては自由奔放な性行動に伴うトラブルがある。特別支援学校卒業後、地域で生活するうえで、日常生活上のマナーを守るとは人間関係を築き集団生活をするうえで重要である。障害児の親の約40%は子どもに「恥ずかしい気持ちが育っていない」ことで悩み、その中でも青年期の子どもをもつ親は44%と高率で心理的な発達に伴う悩みを持っている⁵⁾。「恥ずかしい」という気持ちは、人との関わりの中で熟してくる感情といわれている⁶⁾。知的障害児・者の社会のマナーから外れるような性行動に対しては、その機会をチャンスと捉えて、場に応じた行動が取れるように根気強く関わっ

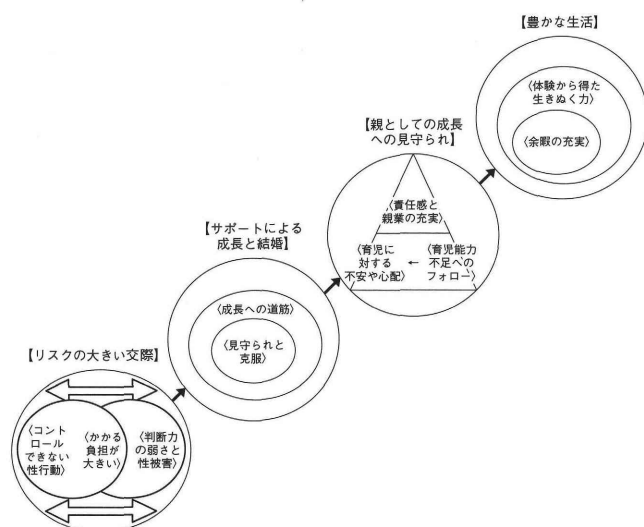


図1 支援者が捉えた性発達の構造

ていく必要がある。

知的障害児・者の家族を対象とした調査によると、知的障害児の性的発達について、78.7%の保護者が障害の有無に関係なく健康な児と同様に発達すると答えている⁷⁾。場に応じた判断力の弱さから、性被害に遭った知的障害者のケースでは、“ノー(いや、だめ)”と拒否できない結果、性の被害者となったものがある。特別支援学校の性教育において“自分の身体は大事な物”という認識と意思表示の大切さを繰り返し教えながら関わっていく必要がある。

2. サポートによる成長と結婚

知的障害のある女子の結婚という決定は、結婚する二人だけの問題ではなく家族全体を巻き込むことになる。個々の家族状況や実態に応じたサポートが必要である。平田は、結婚が可能となる必須条件として、適切な支援者の確保を挙げている⁸⁾。今回の調査で支援者は、知的障害のある女子が、就労を通して生活が安定し将来の見通しや目標ができることは結婚を前向きに考えていくことに繋がると述べていた。結婚を通して夫婦で支え合い、助け合いの中で男女の協力や役割分担を獲得するなど成長していく。知的障害のある女子は、支援者のサポートにより青年期の発達課題を一つ一つ達成し、困難な課題も乗り越えながら成長していく。結婚・出産・育児の中で厳しいことや辛いことなどいろいろな体験を通しての成長は大きく、知的障害のある女子の生きる力を育てることとなる。男女交際の延長線上には結婚・妊娠、出産・育児という選択肢があることを考え、支援者として関わるのが重要である。

3. 親としての成長への見守られ

知的障害のある女性への育児支援に関する実態調査によると、妊娠を早期に知ることが親になる準備として望ましいことや妊娠期からの支援の必要性が述べられている⁹⁾。障害の有無に関係なく、親になり初めての育児は不安と困難の連続である。特に、知的障害のある女子の場合、育児上での緊急判断や対応が困難な場合が多い。状況に応じた支援者のアドバイスやサポートを通して、障害のある女子自身で解決できる力を身に付けていく必要がある。また、支援者は、親になろうとしている知的障害のある女子が、子どもと積極的に向き合い接触が持てるようにサポートする必要

がある。子どもへの愛着が獲得でき育児のできる力を育てられるような関わりが支援者には求められる。育児の指導モデリングの提示や繰り返しの指導などきめ細かな手だてが必要である。支援者の細やかな関わりは知的障害のある女子の育児に対する前向きの気持ちを育て新たな知識を習得することに繋がっていく。飯田は、知的障害のある場合、子どもを持つかどうかは夫婦の基盤がしっかりできてから二人で相談して決めても遅くないと述べている¹⁰⁾。“親になることや子どもを育てる”とはどういうことかを、特別支援学校での性教育や地域の人々との関わりの中で継続してじっくり考えられる場も必要である。

4. 豊かな生活

学校教育期間は一握りの短期間であり、地域の中で生活する時間は生涯にわたる。障害のある人々の余暇の充実生活や仕事への張りにも繋がり、生活の中で大切な土台である。社会性を持って活動ができることは、知的障害のある女子が結婚や育児を順調に行ううえでの基盤となる。日々の生活の中で人間関係のスキルを身に付けることや特別支援学校でも学校卒業後どんな人生を歩みたいのか、夢や希望を実現するためには何が必要であるか等、将来の自分の姿がイメージできるような教育が必要である。

1986年カナダの首都オタワで開催されたWHO国際会議で、新しい健康増進として人々の生きる最終目標は「QOLの向上」であり、健康は「より良い生活のための資源の一つ」とであるという理念が提唱された¹¹⁾。どのような健康状態であろうと、人の生きる意欲の根源に性がある¹¹⁾ことを踏まえて生きぬく力のサポートを考えていかなければならない。

V. 結 論

今回の研究により、知的障害のある女子の性発達に伴う課題と対応について、以下のことが明らかになった。

1. 知的障害のある女子の男女交際の根底には大きなリスクが存在する。
2. 知的障害のある女子は、サポートにより結婚や育児が可能である。
3. 知的障害のある女子は、周囲の支援者に見守られて成長する。知的障害のある女子の性発達を支えることで生きぬく力を身に付け、豊かな生活に繋がる。

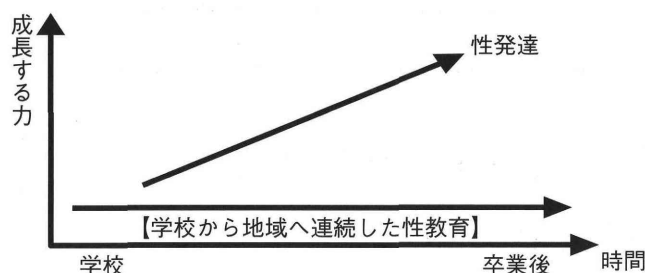


図2 知的障害のある女子の性発達を支える性教育

4. 知的障害のある女子は、数多くの成功・失敗体験を繰り返しながら成長する。

特別支援学校における性教育は、学校と地域の支援者が連携し、学校から地域へ連続した性教育を展開することで知的障害のある女子の性発達を支え成長する力を促進することになる。

謝 辞

本研究の実施にあたり、ご協力くださいました入所更正施設・入所授産施設・通勤寮・グループホームの支援員の皆さま、関係者の方々に心より感謝し、御礼申し上げます。

本研究は、第40回日本看護学会（小児看護）で口演発表した。

文 献

- 1) 松友 了. 知的障害者の人権 問題の整理基本的視点. 松友 了編. 知的障害者の人権. 第2刷東京：明石書店, 2000：14-38.
- 2) 柴田洋弥. 障害程度区分の根本的な見直しについての試案. さぼーと：知的障害福祉研究 2007；54：73.
- 3) 長浜亜希子. 知的障害者の性行動とそれに関わる指導員の対処. 北海道医療大学看護福祉学部紀要 2003；10：22.
- 4) 飯田雅子. ちえおくれの人の「性」をめぐって第1回男女交際. 障害者の福祉 1992；12（2）：41.
- 5) 角田禮三. 障害のある子どもへの性教育の実際. 第5版東京：明治図書, 2005.

6) 前掲5), 33.

7) 宮原春美, 相川勝代. 知的障害児・者の家族のセクシュアリティに関する調査. 長崎大学医療技術短期大学部紀要 2001；14：64.

8) 平田 厚. 知的障害者の自己決定権. 増補版第2刷東京：エンパワメント研究所, 2003.

9) 木戸久美子, 林 隆. 知的障害のある女性への育児支援に関する実態調査. 山口県立大学看護学部紀要 2002；6：51.

10) 飯田雅子. ちえおくれの人の「性」をめぐって第3回結婚生活の実際, 障害者の福祉 1992；12（4）：39.

11) 高村寿子. 性：セクシュアリティの看護. 第2版第2刷東京：建帛社, 2004.

[Summary]

This study was conducted to discuss sex education in special needs schools by examining supporters' views on the sexual development of mentally disabled females. In this study, the term supporter refers to those who have provided livelihood, job, or housing support for young females with intellectual disability. We interviewed ten supporters to ask their views on male-female relationships among the students, their marriage, child-raising, personal relationships, and lifestyle. The interview results were documented and analyzed. Their sexual development as viewed by the supporters was grouped into four core categories: "male-female relationships associated with a high risk", "growth and marriage with support from other people", "having and raising children thanks to an understanding attitude", and "an affluent life". The supporters had a view that they can help mentally disabled females develop by providing appropriate support, although their male-female relationships are associated with a certain level of risk.

[Key words]

support staff, mentally disabled, sexual development